

武蔵野日曜聖書講筈

天の父の全きが如く

——マタイ伝第5章43～48節——

1993年1月24日

小池辰雄

超区別の世界 窓を開ければ光が入ってくる 十字架という土台 聖書は教えではない 降参の姿は十字架 十字架でゼロにされた 満月を懐く三日月 ゼロ＝無限大 キリストと一如 ラビ・ベン・エズラ 幼児の如く

【マタイ5】

43 「なんじの隣を愛し、なんじの仇を憎むべし」と云えることあるを汝等きけり。 44 されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。 45 これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父はその日を悪しき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。 46 なんじら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然するにあらずや。 47 兄弟にのみ挨拶するとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。 48 然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。

●超区別の世界

今日は「天の父の全き如く」という大変なところを学びたいと思います。

43 「なんじの隣を愛し、なんじの仇を憎むべし」と云えることあるを汝等きけり。

キリストはこういうように仰いましたけれども、これは旧約の文字通りではない。これは申命記の言葉で、

「汝一生いつまでも彼らのために平安をもまた幸福をも求むるべからず。」(申命記23・6)

とある。はつきりと「仇を憎むべし」とは書いてない。パウロでもキリストでも、旧約を引用するときに文字通りでない場合がむしろ多いからです。

「隣りを愛するけれども仇は憎む、と書いてあるけれども」と仰っているわけです。

44 されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。



このキリストの言を、また別な表現でパウロも言っています(ロマ12・14～21)。  
 45 これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。  
 「天の父の子とならん為なり」  
 はむしろ、

「天の父の子たることの顕れんためなり」  
 と言った方がいいくらいです。

天の父はその目を悪しき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を止し  
 き者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。

一視同仁だというわけですね。

46 なんじら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然するにあ  
 らずや。 47 兄弟にのみ挨拶するとも何の勝ることかある、異邦人も然するに  
 あらずや。 48 然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。

区別をするな、というわけです。宗教の本当の世界は超区別の世界です。

「良い、悪い」

なんてのは、相対的なことですから、

「そんな相対的判断は止めろ」

ということ。これが本当の宗教の世界の心持ちです。人間はすぐ比較研究をする。そうい  
 う相対的な比較は要らないんだと、この譬えは素晴らしい。お天道さんはすべてを照らす、  
 雨はすべてを潤す、差別はしない。キリストの福音もまさにそうです。受けとる側に差別  
 がいろいろあるわけです。

●窓を開ければ光が入ってくる

讚美歌「いさおなき我を」(271番)

- 1 いさおなき我を 血をもて贖い、  
イエス招き給う、み許にわれゆく。
- 2 つみとがの汚れ 洗うによしなし、  
イエス潔め給う、み許にわれゆく。

これは非常に大事な讚美歌です。

「キリストがこのように招いてくださった、このように潔めてくださった。だから、

私はみ許にいけます」

と。大前提はキリストの側にある。こちらの求めよりも、神・キリストの方が先に与えよ  
 うとしている。

「求めよ、さらば与えられん」

とキリストが言われたけれども、



「それでは、私の求め方が悪いので与えられないのか」  
なんて、そういうような判断をとかくするわけです。あれはそうじゃない。

「私は与えようとしているんだ。だから、求めろ」

と。キリストはそのところを仰らなかつたけれども。神さまが与えようとしている、赦<sup>ゆる</sup>そうとしている。全部、原因と動機はまず神・キリストの側にある。福音はそういうものです。「求めよ、さらば与えられるぞ。私が与えようとしているのだから、さあ、求めなさい。必ず与えるよ」

と。福音というのは上からの啓示、恵み、光、力、生命です。全部、上から来ている。それをいただければいい。こっちは、受けとるだけです。

「こっちの求め方がどうだこっちだ」

ということの問題にしていたら、いつまでたつても始まらない。終いにはくたびれてしまう。福音というものは受けとるものです。これを間違わないようにしてください。あのキリストの言葉に躓いたらいかん。

「尋ねよ、さらば見いだす。門を叩け、さらば開かれん」というと、

「こっち側の熱心が足りないとか開かれなかつたり、見いださなかつたりする」

と、ヘタするとそう思う。そうすると、いわゆる熱心になる。信仰のいわゆるこっち側からの熱心なんていうものはダメなんです。イザヤ書にも

「神の熱心これを為したもう」（イザヤ9:7）

とある。私ははつきり、受けとりの方です。太陽の光をこっちから求めたら、光りますか。そうじゃない。太陽の光はちゃんと光っている。窓を開ければ入ってくる。問題は、窓を開けることだけです。自分の魂の扉を開けることだけです。そうすると入ってくる。ところが、よく一般に聞く言葉は、

「あの人は熱心で、信仰が厚くて」とか、

「私は信仰が薄いから」

なんて、こっち側ばかり考えている。

「信仰薄き者よ」

と、キリストが言われるものだから、

「では、信仰を厚くしなければいかん」

なんて思う。あのキリストの言葉に躓いたらいかん。聖書の言葉もヘタすると躓く言葉がたくさんあるから躓かないように。

「その真意はどこにあるか」

と奥の響きを受けとらないと。



## ● 十字架という土台

要するに受けとりなんです。太陽の光、雨の露、雪の粉、みな受けとる。すると、楽になる。「それでは、私の受けとり方が悪いか」

なんて思うけれども、受けとる土台までできている。それが十字架なんです。十字架という土台がしっかりしていなければ、信仰はみなおかしなことになる。十字架を土台にしない聖霊はあぶない。ヘタするとサタン<sup>すがた</sup>の霊になってしまう。私は「十字架・聖霊」を

「○の中に十」

の図で表わす。これが十字架・聖霊の私の印です。

「この十字架・聖霊の大事な相<sup>すがた</sup>がキリスト教界で果たして本当にできているか」と、だいたい疑問なのがたくさんあるようです。

パウロのように、

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや、我れ生くるにあらず、キリ

ストわがうちに在りて生くるなり」(ガラテヤ2・20)

は、聖霊の世界です。聖霊が来ないで、

「キリストわがうちに在りて生くるなり」

なんて言えっこない。それをただ観念的に受けとってはダメです。十字架が土台になって、パウロは本当に聖霊を言っている。一番キリストに逆らっていたやつがひっくり返って、一番凄いことになった。パウロを抜きにしては、新約聖書の真理はつかめない。ヨハネだけではダメです。ヨハネはスーツとしているからね。ヨハネ伝15章にあるように、

「キリストにつながっている、つながっている」

と言っている。女の方はどちらかというと、ヨハネ的なんです、スーツといく。男は魂の世界が非常に劇的だから、パウロでなければおさまりがつかない。

## ● 聖書は教えではない

福音書はキリストの直<sup>じ</sup>かの言<sup>ことば</sup>、直<sup>じ</sup>かの業<sup>わざ</sup>ですから、この中に自分が飛び込まなければ。福音書の中に自分を飛び込ませて読む。私は

「聖書は教えではない。ドラマである」

と言っている。聖書はドラマだから、その中に自分を投げ入れて、キリストにとつつかまって、キリストにぶつ倒されて、それで、本当につかめる。そういう読み方をしないとね。

「これは意味がどうだこうだ」

なんて、そんなことではない。意味の世界ではない。聖書を読むとは、食いつく、食らう、飲む角度です。そういう受けとり方をしなくてはね。

44 されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。

「仇を愛し、汝らを責むる者のために祈る」



ということとはどん底の愛です。敵を愛するというのは、敵を救いへ持つていくということ。パウロはそのようにしてキリストに愛された。彼はひっくり返った。

「なんぞ我を迫害するか！」（使徒行伝9・4）

というのが愛の言葉なんだ。それで、パウロはひっくり返されて、

「わが眼より鱗うろこの如きもの落ちたり」（使徒行伝9・18）

となった。ルターは、

「神の怒りは愛の別な現れ方である」

とも言った。まさにそうです。十字架を本当に土台とし聖霊をそこにいただいていく。いい加減な気持ちでやっていたらダメです。どん底の担いをやっていく。敵をもひっくり返してしまふ。はつきり言うことは大変いいことです。そうでないと、いい加減にやっていると、自分もダメになるし、相手もダメになる。

### ●降参の姿は十字架

45 これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父はその日を悪あしき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。

雪はどれにも降りかかる、雨はどれにも降りかかる、陽の光はどれをも明るくする。これが「全また全たき」ということです。そして、キリストは、我々に向かって、

48 然さらば汝らの天の父の全また全たきが如く、汝らも全かれ。

と言われた。これ以上の言葉はない。

「こんなことはできるか？」

と、誰でも百人のうちほとんど百人がそう答える。私も

「そんなことができますか」

と答える。

「天の父の全きが如く全かれ」

と、不可能なことをキリストは言われる。どうして、キリストはこんな不可能なことを仰るか。凄いですね、水を割らずに。「天の父の全きが如く全かれ」と、これ以上のキリストの烈しい言葉はない。そうしたらば、私たちはどうしたらいいかというのと、本当に降参する。本当に降参しなければダメですよ。

「私にはとてもそんなことはできません」

と、キリストに平伏す。ゼロに。「とてもできません」という降参の姿は、実は十字架がくださった。我々はどんなにあがいたって、みんな五十歩百歩でどうにもならん。これを「罪びと」という。みな、自我にとらわれている。みな、エゴイストです。

いわゆる禅宗でもって一生懸命で悟ろうとする。悟る世界はたかが知れている。福音の



世界は悟りではない。もっと上の世界だ。悟りというのは消極的です。生命の世界は悟りではない。だから、仏教はどちらかというと消極的なんだ。もちろん、そこから如来の慈悲の力が働く。そういう素晴らしい人もいました。けれども、性格から言うとな消極的なんだ。

### ●十字架でゼロにされた

降参して、キリストの前に平伏す。

「できません」

という無の世界。私が無くなってしまつて、

「私はダメです」

という無私の世界です。この無私の世界は実は十字架がくださっている。

「全部、贖いとつた」

といって、ゼロにしている。

「相対的人間小池なんか問題にするな。そんなものを問題にして何になるか」

というのがキリストの十字架なんです。

私は正直、自分を問題にしてません。しなくなったのではなく、しなくさせられた。キリストに十字架で、問題にしないようにさせられた。そうすると、その十字架でゼロにされたところに本当に入ると、グーッと今度は上昇する。これは聖霊の世界です。本当に降参すると、もの凄い聖霊の働きが動きだす。力であり、光であり、智慧であり、何と言おうと、聖霊の内容は素晴らしいですから。

『全きが如く全かれ』は全然できません」

と言つて平伏すと、そこに御霊の力がやってくる。御霊は無限量なものを持っている。だから、無限量性、無量性です。この「性」の字を忘れてはいかん。現実に無量ではない。また無限でもない。けれども、無量無限の性、そういった質が——性と書いても質と言つてもいい——そういった性質がとにかくここに入つて来て、またそこから出てくる。

### ●満月を懐く三日月

三日月でいいんだ。上弦の月は必ず満月になる。満月を懐くところの三日月です。三日月が満月を懐く。満月を懐く三日月が無限量・無量性をいただいている。そういう三日月です。御霊が来ると、その無限量無量性が入ってくる。限りなく展開していく。無限無量なものを持つのは神さまとキリストだけだ。この無限量・無量性というものが、聖霊の世界でやってくる。

「三日月が満月を懐いている」

のだから凄い。

「やがて天界で満月となる」



ということですよ。天界で満月になることが約束されている。その人らしい満月になる。だから、本当に十字架で救われて聖霊がやってくると、次の世界ではその人らしい素晴らしいものが現れてくる。それが約束されている。それがこの無限性無量性という性の字のついた在り方です。だから、楽しくてしょうがない、希望に満ちてしょうがない。

「希望を懐け」

ではない。希望は上からいただくもの。現実には希望の現実を三日月がちゃんと持っている。

虹は無限の色を持っている。虹は、太陽の無色の光を無色の水滴が受けとると、これが七色に輝く。無色透明なるものが七色に輝く。この七色性を持っているのが聖霊の世界です。

### ●ゼロ＝無限大

だから、キリストが、

「天の父の全きが如く全かれ」

と言ったら、

「とてもできません」

と降参して、そうして祈っていると、そこに聖霊が入ってくる。

キリストのこの烈しい言葉に、誰が「天の父の全きが如く」になれるか。本当はキリスト自身がそうなんです。

「自分は何もできない、何も言えない。自分が教えていることは、神さまが言えと言っていることを言っているだけの話だ」

と、キリストは自分がゼロなんです。ゼロだと、「天の父の全き」が彼の中に入ってきた。イエス自身がまさにゼロだ。

「ゼロ＝無限大」

というのはキリストのことです。我々もまたそのようにして、十字架でゼロにされたから、無限大性が、無量性が入ってくる。これが聖霊の世界です。だから、楽しくてしょうがない。希望が与えられて、希望が現実となっている。

そういう信仰を本当に持っているひとは幾人いるか知らんですよ。普通の教会では、「私の信仰は」

なんて言って、一生懸命で聖書を読んだり、祈ったりするが、そんな相対的なところをいくらグルグル回ったってダメなんだ。

「徹底的に降参しろ、そうしたら今度は無限性を持っている聖霊が入ってくる。三日月でいいんだ、その三日月は満月を懐いている三日月だぞ」

と。いいですか。私の信仰はそういうたちの信仰ですから。人間の自分の信仰なんて、信仰それ自身を問題にしているうちはダメです。

「絶信しろ、信仰になんか絶つしろ、「信仰、信仰」なんて言っているな」



ということ。みんな上から、キリストから受けとるんです。

## ●キリストと一如

イエス・キリストは大変なひとです。東西古今に無比です。その大変な方が自分をゼロとした。だから、これが無限大なんです。お釈迦さんは終りに悟った。終りに悟ったなんて、本当はご苦労さんな話だ。

キリストの世界は、「ゼロ＝無限大」の世界です。これはキリストのことです。だから、そのゼロのキリストが何と言ったかというところ、

「我を見し者は父を見しなり」(ヨハネ14・9)

「無限大なものが私の中に入ってきたから、私を見たものは父(神)を見たのだ」

と言われた。

「何もできない、何も言えない」

と言われたキリストが、

「我を見し者は父を見しなり」

と。実にあざやかなものです。だから、本当に凄いひとです。

私たちはキリストの十字架と聖霊でもって、キリストと同質の世界に入れていただいているわけです。

「我れキリストのうちに、キリストわがうちに」

と、パウロが言った。このキリストとの一如の世界にパウロは入れられた。私もあなた方もみんな、パウロと同じように、その一如の世界に入れる。

「自分が入る」

のではない。「入れていただく」わけだ。

「熾<sup>さか</sup>んなるかな、この信」

という。こつち側が熱心で熾<sup>さか</sup>んなわけではない。人間の熱心なんかあてになるか。くたびれるだけのなし。そういうのが本当の楽しい、楽な、力強い、光に溢れる現実であります。

人間的な整いなんか要りませんよ。そのはつきりした世界を歩いていると、周りのひとが、

「やっぱり、あのひとは本ものだ。その世界に私も入りたいな」

ということになってくる。女性は優しいけれども、ちゃんと芯<sup>しん</sup>がある。芯<sup>しん</sup>というのは、キリストの芯ですよ、自分の自我ではない。

我々は降参<sup>くだま</sup>すると、

「天の父の全きが如く」

という、その完全性というのは聖霊ですから、それでキリストの言葉がちゃんと読める。キリストの言葉を本当に読むのは、そういうことで読むことができる。

「そうだ、お前の言う通りだ」



とキリストは仰ってくださいるよ。

●ラビ・ベン・エズラ

ブラウニングの詩に「ラビ・ベン・エズラ」という長い詩がある。ラビ・ベン・エズラというのは12世紀のユダヤ人です。1090年頃にスペインで生まれた。聖書(旧約)学者でもあるし、医者でもあり、天文学者でもあり、詩人でもある。キリスト教徒に迫害されて、アフリカ、パレスチナ、ペルシャ、インド、イギリスと方々を遍歴した。イスラエルの預言者みたいな人物です。

その詩の一番先に、

Grow old along with me!

The best is yet to be,

The last of life,

For which the first was made:

Our times are in His hand

Who saith A whole I planned,

Youth shows but half; trust God:

See all nor be afraid!

「私と一緒に歳をとれ

最善はこれからだ。

人生の最後のために

最初がつくりられたのである。

我々の人生の時は彼(神・キリスト)のみ手の中にある。

彼は言つ、『全体を私は計画してやったのだ。

青年は半ばに過ぎない。神さまに信頼しろ、

全体を達観しろ、懼れることはないぞ!』

とある。「ラビ・ベン・エズラ」という詩の一番先にブラウニングが、

「私と一緒に歳をとれ、最善はこれからだ」

と書いている。私も、最善はこれからだと思っています。90歳から100歳まで、この間が私にとって最善のときになる。私は空元氣でも何でもなし。上から元氣がくるから。キリストという元氣もとの氣がくる。

「天地正大の氣」

がくる。氣の世界なんだ。氣は風であり靈である。これはヘブライ語もギリシヤ語もそうです。



## ● 幼児の如く

キリストはなぜ、

「おきな幼児の如くならずば天国に入れない」(マタイ18・3)

と言われたかという、幼児は笑う時も、遊ぶ時も、泣く時も、何かいただくときも、全的のです。私は孫を保育園に迎えに行つて、孫の名を呼ぶと、何か一生懸命で遊んでいても、すぐパツと止めてサーツと走つてくる。あれが

「おきな幼児の如く」

ということです。前後を考えないでサーツと、即の世界です。

「全き」という言葉は「テロス」という。しかも、「テロス」という言葉は「目的」も表わす。「終局、目的、完全性、全き」という意味です。ギリシヤ語で「エイス テロス」というと、

「完全にまで、目的を達成するまで、徹底的に」

という意味になる。

「おきな終りまで耐え忍ぶ者は……」

という、「終りまで」です。これから来ている動詞は「テロー(終りまでやり遂げる、成し遂げる)」と言う。キリストの在り方がまさにこれです。瞬間ごとに「全き」を持つている。最後は十字架です。それから復活です。全部、これは成就してしまふ。キリストの相は「テロス」のいろいろな相ですね。いい加減でない。みな、全的です。「全的」という言葉は「テロ」も好きな言葉です。分裂のない世界。

「おきなああだ、こごうだ」

なんてやっている世界ではない。聖書は正直、限らない書ですね。

